uttate
創刊号

特集 商店街
ラプソディー

うったて

City of
Literature
OKAYAMA

文学創造都市おかやま発
「ちいさな物語」マガジン

文学創造都市おかやま発　「ちいさな物語」マガジン

うったて　uttate

「うったて」は文学創造都市おかやまのまちを描く冊子です。
日々の暮らし、人々のいとなみ……まちは物語にあふれています。
耳を傾け、拾い集め、見つめ直し、このちいさな冊子に残していきます。
「ちいさな物語」の一つひとつがまちの歴史であり、文化であり、魅力です。
わたしたちは、それを伝えたいのです。

「うったて」は、書道で筆をおろすその瞬間の「起筆」を指す地域の方言です。
ものごとのはじまりや心構えとして用いることもあります。
文学のまちをここから――「うったて」には、そんな思いを込めました。

Uttate is a booklet which describes the Creative City of Literature, Okayama.
The city is filled with stories... of the daily lives of its people.
We have listened to, revisited, and hunted for these tales, which have been collected in this small booklet.
Each little story represents our city's history, culture and charm. And we want to pass them on.

"Uttate" is a word from shodo or Japanese calligraphy, to describe "the moment when the ink brush first touches the paper."
It can also be used to indicate the beginning of something important, or an attitude of readiness.
'The City of Literature begins with this booklet.' This was the mindset that created Uttate.

もくじ

特集　商店街ラプソディー

エッセイ　商店街に、無限の声が満ちている　乗代雄介……2

歴史と伝統、かつての輝きを個性に変えて
……表町商店街……8

スケッチーズ　表町……11

ひと　まちに育てられたおしゃれリーダー
400年の伝統と誇り、次の世代へ……14

表町商店街クロニクル……16

うったてインタビュー
『奉還町ラプソディ』が生まれた理由　村中李衣……20

「商店街愛」たっぷりの村中さんが案内する奉還町……24

スケッチーズ　奉還町……26

まちとデザイン　デザインで街の心を変える？……30

ZINEからはじまる岡山の旅
ムサシノ工務店『昭和街道』シリーズ……32

エッセイ
物語の始まりそうな川景色―建部井堰　小暮夕紀子……34

執筆者／編集スタッフプロフィル……36

となりの文学都市①　ダニーデン……37

うったてインフォメーション……37

表紙デザイン・奥山太貴／表紙写真・加藤晋平

特集

商店街ラプソディー

今なぜ商店街なのか――文学創造都市おかやまでは、2023年3月に文学フェスティバルを開催。そのなかで表町を会場にした「表町ブックストリート」は、一箱古本市が商店街を行き交う人の足を止め、いつもとは違ったにぎわいをつくった。その後、市民が本を持ち寄る「シェア型書店」が、表町や奉還町の空き店舗を利用して一カ月限定でオープンするなど、「文学のまち」の核となるエリアとして商店街が注目されるようになった。商店街は品物を売る商店だけの寄り合いではなく、地域の歴史や文化の息づかいが感じられる、生活と文化の交流・発信地でもあった。

「うったて」創刊号では、乗代雄介さんをはじめゆかりの作家、しみんライターたちが、商店街をテーマに「推しネタ」持ち寄った。お店の紹介やイベント情報でなく、そこで生業を続ける人やモノの魅力を描くことを試みた。商店街が「文学創造都市おかやま」のシンボル的な存在になってほしい、との期待をこめて――。

写真・加藤晋平

エッセイ

商店街に、無限の声が満ちている

乗代雄介　作家

七月某日午前二時、日中の人通りが嘘のように表町商店街は静まり返っている。二列に並んで遙かに続くアーケードの天窓、飛び石のように右に左に点々と嵌めこまれたステンドグラスも、鮮やかだった昼の輝きを手放している。人がいないのをいいことに右へ左へのんびり進む自転車が、ステンドグラスの合間をスキーのスラロームのように縫っていくように見えたのも束の間、あくら通りを東へふいと曲がっていった。

私は鐘撞堂の小さなレプリカの前に立っているが、それっきり、北を見ても南を見ても誰もいない。店頭に出されていた商品や看板も多くはシャッターの中に引っ込んでいて、商店街は、いくつかの通りを挟んで針の穴のように狭まるまで見通せた。

様々な仕事がひしめく場所だけれど、こんな時間に目につくところで仕事をしているのは私ぐらいのものだった。仕事をしているように見えるかはともかく、私の職業は小説家である。北海道出身の千葉県育ち、東京在住で、二〇一五年にデビューして、今はなんとか専業作家として活動している。

それがどうしてこんな時間にこんな所にいるのか。話は二〇二一年、小説家として食えるか食えないかという微妙な時期に遡る。コロナ禍、塾講師の仕事を辞め、『旅する練習』という小説を書き、芥川賞の候補になったり、三島由紀夫賞をいただいたりして、多くはないが少なくもない人々に読まれ、なんとかやっていけるかもと思っていた頃だ。

その作品が、さらに坪田譲治文学賞の候補になったと連絡がきたのが二〇二一年の冬だった。担当編集者でさえ、坪田譲治という名前から児童文学の賞だと思っていたぐらいだったけれど、私にとっては塾講師をしていた時からかなり思い入れの深い賞で大いに喜んだ。しばらくして授賞するという知らせが来た時は、色々いただいた賞の中でも、いちばん嬉しかったと言っても過言ではない。

坪田譲治文学賞は岡山市が運営する文学賞で、岡山市名誉市民の坪田譲治の業績を称えるとともに、創作活動の奨励と市民文化の向上を目的にして、「大人も子どもも共有できる優れた作品」に与えられる。名前と目的と対象作品がこんなにも合致した賞は、全国を探しても見当たらない。

かつて子供でなかった大人は一人もいないのだから、人間の営みには大人も子供も共有可能なものが必ず潜んでいる。つまりは何事も、本来的には一生のことなのであり、それを生活と言うこともできるだろう。芸術も文学もまた、生活となる可能性を秘めている。「創作活動の奨励と市民文化の向上」には、文学と生きる人、文学の活きる街を目指す岡山市の思いが込められているのだろう。

さて、こうして岡山市との関わりができた私は、ライター・イン・レジデンスに招かれた。「文学分野で活躍する作家に岡山市に滞在してもらい、取材・執筆を行うもの」で、二〇二三、二〇二四年と続けて呼んでいただいている。「こんなに岡山を歩いてくれる人はいない」と言ったところから話が進んだのだから、連日闇雲に二十キロも三十キロも歩いてみるものである。「乗代雄介　岡山市」とでも検索してもらえれば、市内を歩いて書いたものも出てくるので、時間があればご覧いただきたい。

ライター・イン・レジデンスの活動の中でも、風景を文章でスケッチするワークショップを開催したのは、私にとっても大きなことだった。正岡子規が書いている「言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝ見たるまゝに」なんて言葉を手引きにした座学のあと、外に出て岡山城や旭川など実際の景色をスケッチし、帰っ

て来て推敲する。自分のほかには誰も見ていなかった景色を、誰に見せるでもなく、しかし誰にでも伝わるように書く。文学と生きる人、文学の活きる街を育む一助になればと思っている。

そんな「文学による心豊かなまちづくり」を進めてきた岡山市は、二〇二三年に「ユネスコ創造都市ネットワーク」文学分野で加盟都市に認定された。それを機に、岡山市を広く知ってもらおうと刊行されたのが、今あなたが手に取っているこの『うったて』である。

どこかに書いてあるだろうから改めて書かないが、私は当然知らなかったその言葉で言うなら、『うったて』の「うったて」に関わらせてもらえることは本当に光栄なことだ。プロだけでなく市民が気軽に参加できる編集スタイルを目指しているとのことで、市民ライターの勉強の場である「ライターの教室」も開いている。

今、私が南へ表町商店街を見通している先、だいぶ行ったところの右手に文房具店〈ソバラ屋〉がある。先日、その二階にあるレンタルスペースで「ライターの教室」の講師を務めた。三十人ほどの人が集まった。

終わったあとは、少し前まで時計台があったというサーカスドーム広場を東へ曲がり、最初の交差点の角の二階にある〈グレートジャーマンクック〉でアイスバインを囲んで打ち上げ。大皿でドンと置かれた大きな骨付きの豚すね肉を口に入れると、ほろほろほどけながら口の中に旨味と塩気が広がった。その後、一階の〈酒のみむら表町店〉にもお邪魔して、お酒が飲めない体質ながら楽しい時間を過ごした。

行ったことのある、知っている店ができると、そこに明かりが灯ったように、道や距離や方向がなんとなくわかるようになるものだ。その交差点を南に行ったところには〈岡山芸術創造劇場 ハレノワ〉がある。二〇二三年にオープンした新しく立派な劇場で、その地下にある小劇場がワークショップ会場になったこともあった。表町商店街を歩いて会場まで来たという方もいて、その人が岡山城を書いた文章を思い出しな

撮影の途中、シェア型書店「みんなの表町書店」に
足を止める乗代雄介さん（2024年8月）

がら、土曜の賑わう商店街を書いていたらどんなものかと思いを馳せる。

ところが、どんなに思いを馳せたところで、思いも寄らぬところを見るのが人間で、文章はそれを確かめる術でもある。私は岡山を歩きながら、ワークショップでスケッチしてもらう場所についていつも考えている。こんな深夜にがらんとした商店街を見ながらでも、ここでスケッチしてもらうのはどうだろうかと思えるのは、私が見るよりもずっと豊かな風景を見ることのできる人が沢山いるということを知っているからだ。本誌の「スケッチーズ」のコーナーを見てもらってもよくわかるはずが、店について知れば知るほどに、その名を聞くだけで、外観を見るだけで、ふと思い出すだけで、物語は溢れてくる。

ワークショップに来てくれた生徒さんと食事をご一緒したり、街をぶらぶらしたりすることもある。先日は、そのうちの六人で奉還町商店街の土曜夜市に繰り出したが、にぎわいもあって空いている店探しに苦労した。縁のある〈人形のこどもや 本店〉の従業員の方々が、お手すきの時間を割いてお店さがしを手伝ってくれたが、私は店内のシュタイフの人形を見ながら色めき立っているばかりで、そのせいか店はなかなか見つからない。ずっといるわけにもいかず、御礼を言ってまたぶらぶら歩き始めると、東京からワークショップに参加してくれた私と高校が一緒のJさんが、〈moo moo〉という店を見つけて来た。広くはないお店の半分ほどを埋めてしまう我々のために快く席を寄せてくれた時点で感じた居心地の良さに間違いはなく、津山名物の干し肉やホルモン、様々頼んだ小料理のどれも美味しくほっとする味で、最後はサービスの桃までいただいてしまった。

お腹も満たされてまた蒸し暑い夜の中へ。Jさんが宿泊しているのは奉還町商店街の南端にある〈とりいくぐる〉というゲストハウスだという。行ってみると、なるほど、鳥居がある。くぐっていった敷地内には、ゲストハウスだけでなく〈ONIAGE〉という土産物屋や〈ONE SCENE〉という刺繍屋があった。

と、ビール片手に飛び出してきたのは首元から覗くタトゥーが鮮やかな若い男性。酔っ払っているせいか元々の性格なのか、陽気にTシャツの刺繍を自慢してくれた。ボーダーの柄と色と縁取りに合わせたその丸い刺繍は、穴の修繕であるらしい。お気に入りの古着で、前に穴が空いてしまった時に〈ONE SCENE〉で直してもらい、また別のところが空いたので仕事のついでに直しに来たという。配送業だから今日岡山に来たのはたまたまだけれど、さらにたまたま夜市がやっていてテンションが上がり、来店したついでにゴミ出しを手伝ったらビールをもらってこの上なく楽しくなり、そこに人がたくさん来たので嬉しくなって飛び出してしまったそうだ。

普段なら関わることもない人だと思いながらしばし談笑して別れたが、互いにその店に来たというそれだけで繋がることができるのだから、人の縁なんて簡単なものである。そんな縁を繋ぐ場が通りの右にも左にもずらりと並んで、商店街はできている。

帰り道、下ろされたシャッターを指差しながら、中が見えもしない店について、皆が口々に自分の知っていることを話した。ある店の話は、別の場所にある店の話になって、また戻って来たりした。確かに聞いていたのに覚えていないから書けないのが残念だし、忘れぬ店の記憶を持つ皆が羨ましかった。

夜九時を回っていたあの時の奉還町もがらんとしていたが、こうして一人佇む深夜の表町とはやはり違う。今、私はシャッターの奥にあるものを見ることが出来ないし、それについて楽しく話し交わす声もない。でも確実に、今は寝静まったこの商店街に、無限の声が満ちている。それが音もなく、しかし力強い『うったて』をもって文字となり、遠いどこぞへ届くこともあるだろう。

私はこれから何度も岡山を訪れるつもりだ。沢山の声を耳にし、目にし、いつかまた未明の商店街に立ってみた時、下りているシャッターを指差して何かを語り出せるようになっているだろうか。

商店街ラプソディー

歴史と伝統、かつての輝きを個性に変えて……表町商店街

400年以上の歴史を持ち、おかやま文学フェスティバルのイベント「表町ブックストリート」の会場となった表町。岡山市内には、奉還町をはじめ駅前商店街などいくつかあるが、表町はその代表格。大型商業施設の進出、経営者の高齢化、後継者不足などいくつもの課題を抱えているが、解決のためにさまざまな模索も続いている。その特色を生かしたにぎわいが今、新たに生まれてようとしている。一言では語れない商店街の魅力、息づかいを感じてみた。（山川隆之）

群雄割拠の戦国時代が終わりを告げる16世紀の後半、豊臣秀吉を支えた五大老の一人・宇喜多秀家によって築城された岡山城。その城下町の形成とともに表町商店街もカタチを整えていった。400年以上の歴史を数える商店街ということになる。

昭和20年6月の空襲により中心市街地は焼け野原となったが、表町商店街の中心に店を構えていた百貨店の天満屋がいち早くその年の10月10日には店舗を再開し、商店街の復興を牽引し、同時に市街地の再生につながっていった。

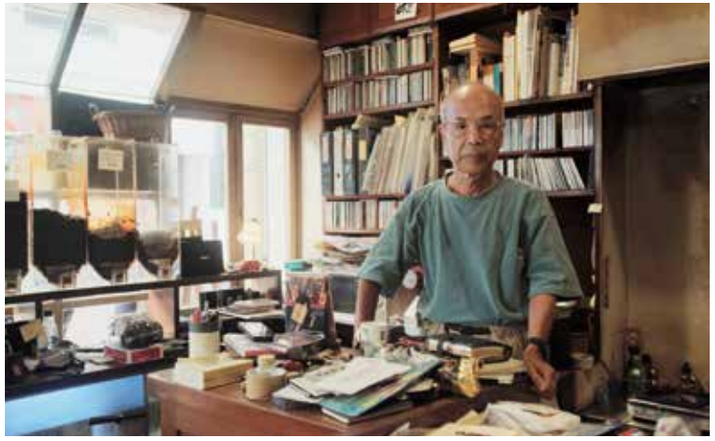
表町商店街は「表八ヶ町」と呼ばれ、8つの商店街により構成されていて、一括りにできないほどそれぞれが特色と個性を持っている。

カフェ「フォークロア」2階の窓から見下ろす、路面電車の風景。
左は、西大寺町商店街アーケードの入り口。

「ハレノワ」の建設に伴って登場した千日前のマンション群。

商店街が交差する千日前のサーカスドーム。世界三大サーカスのひとつ木下サーカスはここで誕生した。

オランダ通り。表町商店街の東側の路地には飲食店が数多く店を構える。昭和40年代ごろまでは岡山を代表する歓楽街だった。商店街の店主や従業員が一日の仕事の疲れを癒した。



kaffa（カッファ）。旧南時計台の角にある珈琲専門店（西大寺町）。マスターの佐々木行夫さんは珈琲一筋40年。豆は東京コクテール堂のオールドビーンズを使用している。一見寡黙に見えるが、音楽（ジャズ）、地理、歴史と、ジャンルを問わず繰り出す話題は豊富。マスターとのコアな語らいを楽しむ常連客が後を絶たない。オートバイ歴は50年。あちこち放浪するのが趣味という。アンテナの高さはそのせい？と問うと「情報は意外にじっとしている人のところに集まってくる」とぽつり。甘く芳醇な香りの珈琲はもちろん、店の雰囲気もマスターも、時を経たエイジングの魅力が詰まっている。

変貌著しい千日前

ここ数年で一番変貌を遂げたのが千日前商店街とその周辺。2023年9月に岡山芸術創造劇場ハレノワが開館し、その建設に伴って高層マンションが建設されるなど周辺は大きく変わった。

旧山陽道・京橋を渡り岡山城下へ。ここはいわば岡山のまちへの玄関口。昭和30年代ごろまで、京橋は海上交通の要衝であり、にぎわいの場所だった。

千日前の景観はすっかり変わってしまった。正面は新しく完成した芸術創造劇場ハレノワ。親の世代から周辺の割烹や居酒屋を支えてきた「魚のみやわき」（鮮魚店）も再開発に伴いリニューアル。近隣住人向けのメニューを用意するようになった。

大店（おおだな）の上下（かみしも）を脱いで新しい在り方を模索

庶民的な下町の雰囲気が色濃く残る南側に比べ、栄町から北側の下ノ町、中之町、そして上之町は、かつて大店

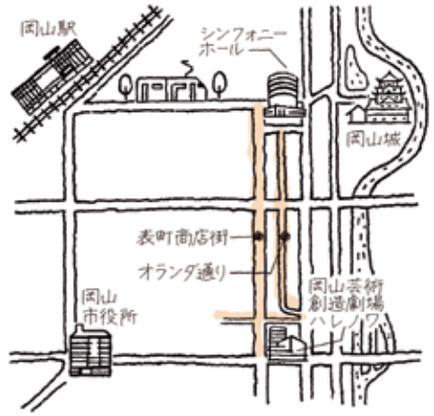
木畑商店。創業は1935年というから商店街南部にある店の中でも最古参。現在の店は戦後まもなく建てられたもので、右から読む看板がその時代を物語る。調理器具や金物、食器、お盆、汁椀、掃除用品、カクテルシェーカーまで、台所にあるもの全般を扱う。昔から、木畑商店の品々はひとつひとつモノがよい、と評判だった。昭和感漂うアカオアルミのやかんや仔犬印の寸胴鍋…。いずれも今も変わらぬロングセラー。鋳鉄のすきやき鍋も眺めているだけで贅沢な気分になれる。職人さんが作る調理道具は丈夫で美しく、機能的。「使い勝手がよい上に、とにかく料理を美味しくしてくれるのよ」と奥さん。昔ながらのハタキやほうきも今なお健在。昭和の豊かな暮らしが蘇る。

上之町商店街のアーケードの天井を彩る？巨大恐竜のオブジェ。なぜ恐竜なのか、何人かに尋ねたが明確な答えはなかった。

空き店舗を利用し「みんなの表町書店」など表町の活性化を引っ張る商店街の若きリーダー片山進平さん。

Orabレコード。ビルの2階に2年前にオープンしたアナログレコード店。あまりにも目立たないのでは？と尋ねると「ひっそりとした空間が好きなんです」と店長の黒田秀徳さん。黒田さんが好きなアンビエントな音楽を求めて県外からの客も多い。

「豆腐処おかべ」。食品材料の卸業を扱っていた株式会社白石商店が昭和58年に創業の地の表町1丁目にオープンしたアンテナショップ。当時、「生産直売の店は珍しかった」と店主の白石さん。隣には豆腐料理を味わえる食堂があり、食事をしてもらってその足で買って帰ってもらえたらとの狙いだったが、「売店」のほうが知名度が高いのだとか。



表町商店街メモ

北から上之町商店街、中之町商店街、下之町商店街、栄町商店街、紙屋町商店街、千日前商店街の順に南に伸びている。また、紙屋町商店街と千日前商店街の間に十字路（サーカスドーム）があり、そこから東西に西大寺町商店街が伸びており、さらにその西に新西大寺町商店街が位置している。岡山市商店会連合会の黒田浩一会長によると、「南の千日前周辺は歓楽街で庶民的な雰囲気、北側は高級な店が多く店主が粋でかっこいい人が多かった」とのこと。

と呼ばれた店が軒を連ねた。昭和24年、商店街の中程に位置する百貨店・天満屋にバスセンターが完成したこともありにぎわいをみせた。店主の高齢化、後継者不足で一時期空き店舗が増えたが、シェア型書店を企画したり、ネットニュースのスタジオや地下イベントスペースなどが誕生したり、従来の商店街とは異なる雰囲気が醸し出されるようになった。

The Sketches

朝ドラ安子の店のモデル

岡山の商店街と聞いて思い出すのが、NHK朝の連続ドラマ「カムカムエブリバディ」である。岡山が舞台の安子編、和菓子店・たちばなのモデルとなった和菓子屋が表町商店街にある。その名も「御菓子司翁軒」。昭和にタイムスリップしたような店の外観だけでなく、店内も昔ながらの趣と、素朴ながらも洗練された昔懐かしい手作りの和菓子が売られ、幾つもの時代を越えて存在する店そのものに圧倒されてしまいそうになる。

店のご主人である田邊さん。下のお名前はなんと、稔さん。ドラマの登場人物と同じ名前である。創業明治二十二年というのだからドラマ同様、空襲による戦禍も経過し、戦後の混乱も乗り越えてきたに違いない。ドラマでは孫のひなたが祖母の安子を追いかけ、表町商店街を駆けぬける場面がある。商店街の長いアーケードを走り続ける祖母と孫。戦争を経験した祖母と、平和な時代に生まれ育った孫の、時代も世代も超えてひとつに結びつこうとする場面に胸が熱くなった方もいるのではなかろうか。祖父母の代から両親の代へ、そして孫の世代からその下の世代に繋がるまで、長く愛され続ける商店街だ。地元岡山の人たちの誇りとも呼べる商店街にある店が、ドラマのモデルになり、撮影地に選ばれたことは大きな喜びである。

ドラマ終了後閉店した「御菓子司翁軒」

実はこの店、ドラマ放送終了後、ほどなく閉業してしまった。放送を見た人たちの記憶にドラマの感動が残っているように、地元の人間にとってこの店は、ずっと心に残り続けるだろう。是非ご家族や友人と連れ立って表町商店街へお越しいただき、ドラマの登場人物が駆けぬけた商店街を、登場人物になった気持ちで歩いていただきたい。身近な人たちとともに、かけがえのない時間を過ごすことで、きっと満たされた心になり、大切な人たちのことを今よりもっと、強く思い続けることができるかもしれない。（山口裕喜）

「待ってはくれない」

表町界隈での待ち合わせといえば「サテスタ」だった。天満屋岡山本店の北東のはじっこ、山陽放送のサテライトスタジオのガラス張りのブースの前でだれかれと幾度待ち合わせただろう。今はアリスの広場と呼ばれ、ブースの代わりにブロンズの三月うさぎが大きな時計を示してラッパを吹き、その西側にはMadHatterのシルクハット、球体の上にでんと座るアリスのブロンズ像が据えてあり、待ち合わせ場所として引き続き時を刻んでいる。

私がサテスタで待ち合わせをしていた昭和50年代後半、サテスタの向かいには不二家の看板娘ペこちゃんがいて道行く人を奥の喫茶へと誘っていた。今、ペこちゃんはいなくなり喫茶はビアンコに。その少し南にはチョコクロで一躍全国区となったサンマルクカフェがセルフオーダーの店を構えている。

大元に少しおしゃれなベーカリーレストランとしてサンマルクができたのは年号が平成に改まった年の春。連れて行ってくれた当時の恋人は「サンマルクのもとはうちの近所の新谷製菓」と教えてくれた。その恋人とは表町の不二家にもよく立ち寄ったがその先の人生を共にはしなかった。

令和五年夏。アリスの広場から上之町に向かい歩いてすぐのアートスペーステトラヘドロンで毎年恒例豆本展が開催された。牛窓焼の陶芸作家黒住泰久さんと立ち寄り、ご出店のきまぐれギャラリー一颯かんのご店主河岡恭弘

アリスの広場。脇には宇喜多氏が備前福岡の商人を城下に呼び寄せて作った福岡町が下之町と名を変えたとの石碑も

さんと奥さまの祐子さんを訪ねた。休憩と称して4人でサンマルクカフェに立ち寄った。河岡さんはチベットの奥地を旅した時の手作り旅行記を持参、おのおのの飲み物を前に写真のそばに添えてある粋なコメントやら絵描きの奥さまの洒落た墨絵やらを見ながらチベット仏教の奥義などについて話の花が咲いた。年明けて三月、河岡さんの奥さまは急な病で逝ってしまわれた。テトラヘドロンでは今年も恒例の豆本展。今年は河岡さんがお一人でお見えになる。（茉莉亜まり）

映画の中の表町商店街

表町商店街は約四百年の歴史がある県下最大の商店街である。商店街の道幅は広く、夏場には一部、冷房が利く場所もあり、長いアーケードによって季節を問わず歩きやすい全天候型の商店街だ。

この表町商店街、実は商業施設以外のことで利用されている。映画のロケ地として度々、利用されているのだ。映画「8年越しの花嫁　奇跡の実話」は、題名どおり実際にあったできごとで、恋人である二人の主人公は岡山に実在するカップルである。映画の中でこの二人が出会い、初めて言葉を交わす重要な場面で、表町商店街がスクリーンに出てくる。この映画の他にも「推しが武道館にいってくれたら死ぬ」や「恋は光り」といった映画の撮影にも使われ、表町商店街は知る人ぞ知る、映画の聖地なのだ。

映画、ドラマに使われる表町商店街アーケード

晴れの国といわれる岡山県が、映画ロケ地の誘致に力を入れ、アメリカの映画産業の本場「ハリウッド」をもじった、晴れの国「ハレウッド」として、邦画の都を目指していることをご存じだろうか。天候が良いことで撮影スケジュールが左右されにくい長所を押し出すことは、自然のことと思われる。だが前述のように、アーケードに覆われた全天候型の商店街が、多くの映画の撮影地に選ばれるのはどうしてだろう。それは、表町商店街が持つ「個性」によるものではなかろうか。

岡山は発信力が弱いといわれることがある。岡山人は自分が自分がといった、激しい自己主張をしないのだ。「岡山」という出過ぎたイメージを潔しとしない性格が、岡山の商店街にも現れている。強烈な個性がないということが返って、商店街が本来持っている懐かしさや安心感、多くの人の記憶に眠る、商店街の思い出を自然と呼び起こすのだ。アクの少ない個性を表町商店街が持ったことで、どんな映画のイメージも壊すことなく、作品自体を何色にでも染めることができる表町商店街は、これからも映画のロケ地として何度でも選ばれるものと思う。矛盾するようだが、表町商店街は素晴らしい魅力的な店がたくさんある素敵な商店街である。岡山の季節の果物を販売する店や、ここでしか味わえない地元の和菓子を売る老舗など、実は「個性」豊かな商店街だ。今度の休みに表町商店街を訪れてみてはいかがだろう。もしかするとあなた自身が映画の主人公になれるかもしれない。（山口裕喜）

上を向いて歩くと

岡山駅から路面電車（東山線）に乗り「西大寺町・岡山芸術創造劇場ハレノワ前」電停で降りれば、そこが西大寺町商店街東入口。見上げると、アーケードの始まりに「OKAYAMA・GINZA」とある。

「変わっている存在は、商店街の真ん中に安田海上火災保険、三菱銀行岡山支店が置かれているということだろう。純然たる商店街の中に、こうした金融機関が置かれているのは珍しく他町内では見られないもの。商店街そのものは、東京銀座の向こうをはって岡山銀座と名付けられ、岡山人には、スズラン燈の輝く、銀座通りとして親しまれ愛されている」文章からは当時の町の勢いが伝わってくる（岡山新聞社「現代岡山町誌」、昭和33年3月10日発行）。

昭和33年度の住宅地図を見ながら、現在も営業する隆文堂書店のご主人に話を聞いた。「うちは創業明治38年。お隣の佐々木旗店、大島屋洋品も続いている。大島屋は紳士物を売っていたが、今は喫茶店をされている」。次の日、カフェテリア「マザー・オブ306」が定休日でうなだれていたところ、珍しくシャッターを開け立ち話をするかど屋呉服店の奥さんにお会いできた。「昔は京橋に港があってなあ。乗りに行く人、降りた人がみなここを通って、大変な賑わいじゃったんよ」と当時を振り返ってくださった。

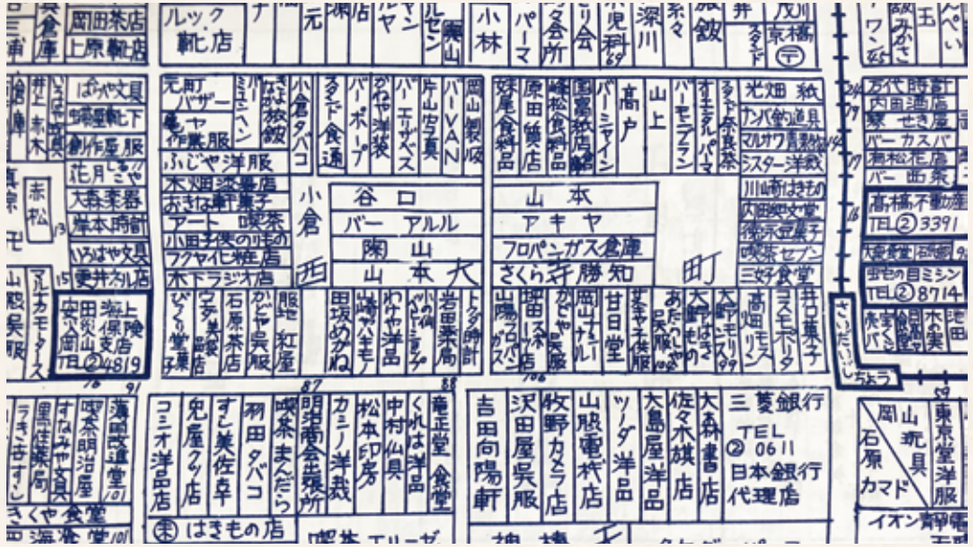
昔の岡山市の様子を新聞で調べる中、こんな記事を見つけた。

「西大寺町のシルバーアーケードの一角にこのほど24センチの電池時計がぶら下げられ市民たちに喜ばれている。この時計は市民に正確な時間を知らせてあげようと、同町内の岸本時計店主が取り付けたもの。同氏の話では『駅のホームなどにある時計と同じで、1ヵ月たってもほとんど時間に狂いは無い』という」。

普段気付きにくいアーケードの天井に、その時計はある。代替りはしているだろうが、66年前からこの場所に時計がぶら下げられていて、行き交う人々を見守ってきたのだ。

戦後の岡山市都市計画で商店街移転の危機があったこと、そのためにアーケードの設置が遅れていることが「現代岡山町誌」に書かれている。移転に反対する商店会は、表八カ町で最後になってしまったアーケードを明日にでも設置できるよう資金を準備していたという。

移転をまぬがれ現在に至る町と共に時を刻み続けたぶら下がり時計。「えっ、時計？どこにありますか？」（隆文堂書店の従業員さん）、「時計？あったかなあ。ああ、あそこにぶら下がっとる時計！」（かど屋呉服店の奥さん）、「あれは、昭和40年代じゃったかな、ライオンズができた記念に岸本時計店が用意した時計じゃな」（かつての大島屋店主のマスター）。上を向いて歩いていると出会える「銀座の時計」だ。（阿部ゆきの）



「岡山市住宅案内図　昭和33年度」（日本住宅地図刊行会編）より

アーケードで時を刻み続けるぶら下がり時計

ひと

まちに育てられたおしゃれリーダー 400年の伝統と誇り、次の世代へ

セレクトショップ「ｋｏｋａ」オーナー　三宅直人さん

「表町は、店もお客さんもこだわりのある人が多いんですよ」

そう言うこの人もその一人だろう。20世紀初頭のパリを闊歩した画家藤田嗣治を思わせる、おかっぱ頭に丸眼鏡。イタリア製のジャケットをはおる三宅直人さんは、表町商店街アーケードの東側、江戸末期に医師シーボルトの娘が暮らしたというオランダ通りで、セレクトショップ「ｋｏｋａ」を営む。

倉敷市出身。幼少から洋服が好きで、高校時代は岡山市出身のデザイナー故石津謙介さんが興したＶＡＮなどのトラッドスタイルで決めた。「服にずっと囲まれていたい」と卒業後、商店街の中心にある百貨店・天満屋の婦人服売り場でキャリアをスタート。インポート服を扱うメンズの老舗「ＢＲＯＯＫ」を経て２００２年に独立し、表町歴は40年になる。

若い頃は春夏、秋冬のシーズンごとにパリやミラノのショーへ足を運び、買い付けした。岡山で初めて紹介したブランドも多く、現在の店もヘルノやメゾンマルジェラなど自ら選んだ旬の欧州ブランドを取りそろえる。

「日本製の方が品質は高いんです。でも服には作り手の感性が反映する。イタリアのシャツは、職人が素敵な女性に視線を送ったりしながら縫うから、所々でテンションが変わる。そんな不良品になりかねない〝遊び〟が着心地や格好良さ、色気につながると思う」。微細な差が分かる人が表町に来るのだ。

その理由を「４００年の伝統と誇り」とする。表町商店街は16世紀後半、戦国武将宇喜多氏が岡山城を築いた際、中世の商都・備前福岡（現瀬戸内市）から商人を呼び寄せたのが起源とされる。近年は岡山駅前の大型商業施設がにぎわうが「表町は近世以来の岡山の商いと文化の発信地。創業百年を超える店もあり、個性豊かな店が集まる商店街は知れば知るほど面白い」。

育ててくれた町へのお礼として、７年前から商店街の役員を務める傍ら、エンタメでの盛り上げに乗り出している。プロダクション「表町キュレーションズ」を立ち上げアイドルを育成、ライブ会場にもなる地下のイベントスペース「表町シェルター」も運営する。アイドルには地元ＲＳＫ山陽放送のラジオでパーソナリティーを務めるメンバーもいて、商店街での撮影会は「宣伝効果もあり、何より推し活は関わる人を元気にします」。

取材中、店には服を選びにきた客のほか、アイドルのファンやイベントの企画者らが次々訪れた。「何屋なんだか分からなくなってきた」と笑う三宅さん。「商店街を次の世代へつなぐ橋渡し役になれたらいい」と先を見つめる。

（岡田智美・文／加藤晋平・写真）

表町商店街クロニクル

商店街は過去と現在がつながる場所

三村佳代子　酒のみむら表町店店主

会社勤めを辞めて、生まれ育った西大寺町で小商い暮らしをスタート。カルチャー全盛の70年代から現在までの表町を個人的記憶で振り返ってみた。

（イラストレーション・eri kubo）

商店街南部のシンボル的存在だった南時計台（現サーカスドーム）。昭和40年代当時は鏡張りではなく、こんな形をしていた。撤去後の現在は、イベント広場として音楽ステージなどの催しが行われている。

今から8年ほど前のある日のこと、夕刊の一面を見て驚いた。新しい岡山市民会館の建設地が表町の千日前（3丁目）に最終決定したというニュースである。

「え、天神町じゃなく？　表町になったん？」

当時表町3丁目の千日前や西大寺町は、さびれたシャッター街と化していた。人通りはなく昼間でも薄暗い。夜7時を過ぎれば真っ暗闇である。天満屋からその先の上之町までの〝アベニュー〟とは異なり、こっちは昭和から時が止まったままだった。

この人気（ひとけ）のないエリアに新たに芸術劇場がお目見えするなんて……。

1970年〜

そんな表町3丁目も、かつて岡山の街一番の華やかなりし時代があった。

私の実家は西大寺町で商売をしていたのだが、すぐ隣の千日前商店街は多い時で映画館が9館も建ち並ぶ庶民の娯楽の中心地だった。商店の数も人の流れも今よりもっともっと多かった。

子どもの頃の遊び場はもっぱらアーケードの中。魚屋[1]のあんちゃんの掛け声、精肉店[2]の揚げたてのコロッケ、天津甘栗の量り売り[3]、金魚屋[4]さんにかき氷屋[5]さん、幼なじみの饅頭屋[6]さん、大勢の人で賑わっていた日限の縁日や花火大会、歳末の大売り出し……、下町ゾーンならではの雑多な光景が今でも断片的によみがえる。少し入った路地には小さなスナックやバーがひしめき夜の街を照らしていた。たくさんの人が、家族が、この街で商いをしながら暮らしていたのである。

1980年〜

賑やかな景気が続き、時代はバブルに突入。80年代は書店とレコード店[7]と音楽喫茶に入り浸っていた。10代後半から20代はラジオの深夜放送と本とロックでひたすら時間を浪費していたように思う。商店街もこの頃まではまだまだ活気があった。『ハスラー』というビリヤード映画が流行り、千日前に突如としてプールバーが現れたりもした。ディスコやカフェバー、ライブハウスなど、若者が表町に繰り出し謳歌できる場所もいろいろあった。今はなき南時計台の近くに、合コンスポットとして有名なパブ[8]があって、週末になると大学生のグループで賑わっていたのを思い出す。

1990年〜

バブル崩壊後あたりからコンビニが街にあふれ、大型ショッピングモールに人が吸収されるようになると、商店街に少しずつ翳りが見え始める。時代の波に呑み込まれるように、慣れ親しんだ店が一軒、また一軒と閉店していった。ザッハトルテが絶品だった洋菓子店も、品の良いご夫婦が営んでいた静かな喫茶店も、かのレコード店もいつのまにか消えてなくなっていた。

その一方で、商店街の復興を賭けてシンフォニービル周辺の再開発計画が立ち上がり、上之町は「アムスメール」というおしゃれな名前とともに生まれ変わった。表町商店街が一気に（ここだけ）イメージアップされたみたいだった。

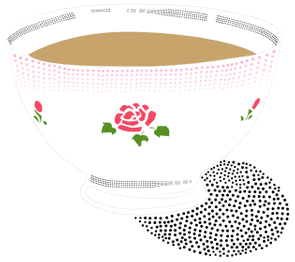
テアトル岡山で当時ちょっと背伸びをして観たアメリカ映画「アニーホール」(1977年製作)。ダイアン・キートンのファッションがなにしろカッコ良かった。

千日前にあった映画館のひとつ「**70mmテアトル岡山**」。超ワイドスクリーンで大迫力の映像が楽しめた。70mmフィルムを上映できる映画館はもう国内には残っていないらしい。今にしてみれば贅沢すぎる映画体験だった。

３丁目にあった音楽喫茶「**コスモグラフィア**」。筆者が高校生の頃はプログレッシブロックがよくかかっていた。その後はアフリカ音楽やワールド系に変わった。原田宗典の小説『十七歳だった！』にも登場する。

2000年〜

西大寺町の実家は高齢の両親が細々と商売をつないでいたが、ついに店をたたむことになり、父は上階の一室にこもって隠居の身となった。町内も数軒の店がぽつんと開いているだけになり、以前のような活気はかけらもなくなっていた。空っぽになった実家の店の入り口には「テナント募集」の看板が掲げられ、このまま街が無人化していくように思えた。期待する借り手は現れず、店の前のアーケードは薄暗く静まり返ったまま時が過ぎていった。



オランダ通りにあったこぢんまりとしたカフェ『**喫茶白樺**』。取手のないフランス式のカフェオレボウルに初めて出会い、その可愛らしさにときめいた。いつ頃まで店があったか、すでに定かではない。

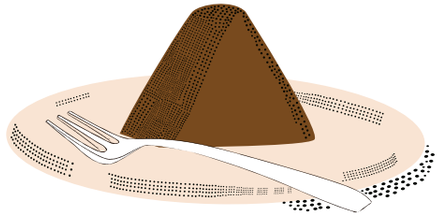
2010年〜

父の様子うかがいで表町に帰ってくるたび正直、気が滅入った。店（建物）というのは人が使わなくなると陰気になって傷んでいく。ここをどうにか使えるようにしないと、廃頽の一途を辿っていくだけのように思えた。

実家の商売を継ぐことはできなかったが、コミュニティに根ざした小商いに少なからず興味はあったのだと思う。

今にして思えば半ば成り行きとしか言いようがないが、結局、ここを引き継ぐために、それまで勤めていた会社を辞めることにし、生まれ育った街でミセをしながら新たな暮らしを始めることにした。手持ちの貯金で店の中を改装し、伝手を頼って建物の保守工事にも取り掛かった。

あいかわらず昼間でも薄暗く人通りはなかったが、新しい市民会館建設の噂が耳に入るようになり、もしや千日前に決まったら何かが変わるかもしれない。そんな期待もあった。



紙屋町商店街からちょっと入ったところにあったパンと洋菓子の店「**ジャーマン・ベーカリー**」。ケーキは大人の異国の味がした。記憶の中のザッハトルテはこんな三角形をしていたように思うのだが…。

2020年〜

2023年9月、岡山芸術創造劇場（ハレノワ）が千日前に誕生。その翌年の4月には店の目の前に15階建ての瀟洒なマンションが完成した。少し前まで、パチンコ帰りの近所のおじさんしか歩いてなかった暗い3丁目に、上品なマダムが愛犬を連れてアーケードの中を散歩している。驚くべき変化である。こうして街は時代とともにどんどん変わっていくのだろう。

西大寺町のミセは酒販店としてオープンした。夫の実家がもともと酒屋で、「酒のみむら」という屋号で家業を継いでいることもあって、その2号店を表町で展開している。商品ラインアップは、全国の地酒、伝統調味料、自然派ワイン、自然食といった具合だ。自分達の身の丈にあった規模で、そこそこにニッチな品揃えで、競争に巻き込まれない程度の専門性を確保しつつ、無理のないペースで続けられる、いわゆる普段着の小商いというところに行き着いた感じである。今のところ2店舗をそれぞれワンオペで回している。

店を始めてみると、毎日いろいろな人との出会いがある。前職も人と関わる機会は多かったが、小商いだと相手の肩書きに関係なくフラットでプライベートなコミュニケーションがなりたつ。ちなみに表町の店では、立ち飲み1グラス300円〜で日本酒やワインを楽しめる試飲コーナーを設けていて、気軽に利用してもらいながら、時に雑談を楽しんだりしている。

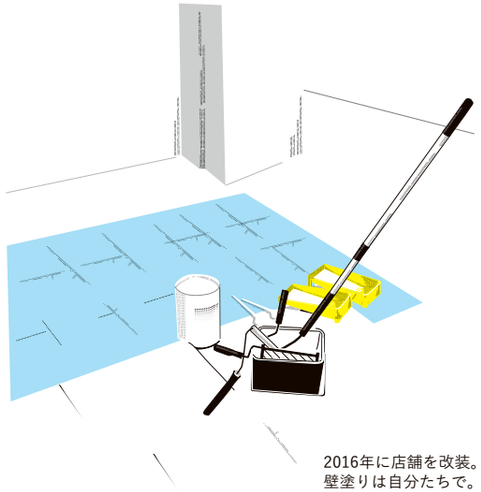
商店街での商いというのは人との対話があって、個がつながるのが面白い。店側の対応もマニュアル化されていないので、なんとなく店主の人となりがにじみ出る。顔の見える関係性の中で話題が共有され、共通の「場」ができる。そしてその先にコミュニティが生まれる気がする。

商店街南部の西大寺町界隈は、アーケードが古いままということもあって、昭和の匂いが残っている方だと個人的には思う。ハレノワ東側から北にアーケードをはさんでオランダ通りに入ると、飲み屋のあるうらぶれた風景に出くわす。近代的な劇場と洗練されたマンションの外観とは対照的に、こっちは古くて建物の感じもバラバラで、コントロールされていない横丁の世界だ。なにげにぼろい（もとい、年季の入った）物件で、店主が自由きままに看板をあげてやっていて、夜になると下手なカラオケの声や陽気な声が聞こえてきたりする。この温度感がいいという人もいて、こういう人の匂いや記憶がこびりついたような場所もまた商店街には必要だと思うのである。

商店街は、過去と現在が入り混じることで、均一ではないミックスカルチャー的なものが生まれる場所だと思う。新しいトレンドを発信するショップやスポットがある一方で、懐かしさを呼び起こさせるものも散らばっていて、その脇にごちゃごちゃとした路地裏的な異空間が付随している。そして新星のように現れたハレノワでは、今をときめく質の高い演劇やエンターテイメントが楽しめる。最近ではマルシェやブックストリートなど、商店街の中でのポップアップ的なイベントも人気だ。その一括りにはできないコントラストがありきたりではない街の魅力につながっていく。表町商店街には、アカデミックにも大衆的にもなれる振り幅があるのだ。

70年代のあのパラダイス的なワケのわからないギラギラとした商店街の空気とディープな人間模様が懐かしくも愛おしい。そんな記憶もあって、商店街の魅力はやっぱり「人」なのかなあと思う。多種多様な店と多彩な店主、そこに新旧の人が交わりチャンプルーにつながる街が文化的で面白い。

昨年、店の奥に古いままの空間を活かして小さなシェアスペースを設えた。さまざまな嗜好や表現を持つ人たちが集まってシェアできるような、そんな循環的なつながりが生まれる場になればと思っている。



2016年に店舗を改装。壁塗りは自分たちで。

‘70〜’80年代 西大寺町＆千日前アーカイブ

▼1 魚のみやわき
千日前に店を構える昭和37年創業の老舗鮮魚店。もともとは今のハレノワの場所に店があったそうだ。家庭用はもちろん、高級料亭や寿司店など、プロ御用達の鮮魚を扱っている。

▼2 山正精肉店
カレー風味のコロッケが絶妙に美味しかった。よく夕飯のおかずにもなったし、映画を観にいく時にも買って持ち込んでいた。

▼3 藤田改進堂
旧南時計台の南東角にあったお菓子屋さん。天津甘栗が名物で、秋になると店先から香ばしい焼き栗の匂いがしていた。

▼4 乙武（おとたけ）金魚店
夏の間は金魚店（＆金魚すくい）、冬になるとたこ焼き屋に様変わりする。実家の斜め向かいにあったので子どもの頃よく出入りした。金魚を売って商売が成り立っていたなんて、いい時代だったと思う。

▼5 びっくり堂
旧南時計台の北東角にあったお店で（現カッファが後代にあたる）、アイスクリームにかき氷、冬は太鼓饅頭を焼いていた。子どもにはなくてはならないお店だった。

▼6 福福饅頭
ミルクセーキが大人気だった。今は二代目が伊福町で「ぷくぷく氷」というお店をされています。

▼7 大森楽器と栗山楽器
表町商店街の中にあったレコード屋さんといえばこの2店。栗山楽器は天満屋の前あたりにあったと記憶している。

▼8 ベントハウス
パブ兼ライブハウス。木質感のある洒落た空間で、いつも若者たちで賑わっていた。

（写真提供：「kaffa」店主・佐々木行夫さん）

うったてインタビュー

『奉還町ラプソディ』が生まれた理由

作家・村中李衣さん

仕事場となる大学に近い奉還町で初めての岡山生活を送ることになった村中李衣さん。個性的な商店街の面々に戸惑いながら、そこでの生活に魅了されていく。「もう狂詩曲としかいいようがない」という8年間の奉還町暮らしから生まれたのが『奉還町ラプソディ』。作品が誕生した背景などをうかがった。

（聞き手・山川隆之／文・黒部麻子／写真・加藤晋平）

こそLEDの提灯がつきましたが、当時は真っ暗で、一直線のアーケード街で抜け道がないというのも怖かった。日中の明るい時なら、いくつか横に細い道が出ているって分かるんだけど、夜だったので、ここは入ったら最後、出られんと。後ろを振り向いても薄い光しかなくて、前に進むしかない。ずっと先には国体通りが見えている。あそこまで行くしかないんだな、ここから始まるんだな。それが忘れもしない、奉還町商店街の第一印象でした。

——あまりいい印象ではなかったんですね。

誰かと友達になるしかないと思い、商店街の人たちに声をかけてみたんです。最初が乾物屋さんでした。夕方だったので、残っているもの全部買えばちょっと安くなるかなと思って、「全部買うからまけて」と言ったのですが返事がない。なんて無愛想なんだろうと思いました。あとでその話を、よそからここに来た人に話したら、「ここはもともと、明治維新で失職した武士たちが奉還金で商売を始めた町。だから、『負ける』っていうのは武士としてありえないんじゃない？」と言われ、なるほど！と思いました。

他にも、もうご病気でお店をたたまれましたが、洋服屋さんのおじちゃんも、怖い雰囲気の人でした。朝8時くらいから店の前に立っていて、夕方私が帰ってきてもまだ立っている。またある時は、布団屋さんの前にワゴンが出ていたから、中のものを手に取ってみたら「それはあんたには入らない」と言われて。でもその後、私はこの布団屋さんで布団を買い、枕も買い、乾物屋さんでも楽しく買い物できるようになりました。

人って面白いですね。入り口が柔らかくて入っていく場合もあるけど、固いものが溶けていく感じが面白いという付き合いもあるんですね。

固いものが溶けていく面白さ

——岡山に来られたのは？

ちょうど10年前、２０１４年４月からノートルダム清心女子大学に着任することになり、１月の終わりに初めて岡山に来ました。その直前に母がくも膜下出血で倒れ、いきなり介護が始まった中で、私の連れ合いと息子と父、３人の男たちを残して家を出ることになってしまいました。新しい町で暮らせるかな……と思いながら岡山駅に降り立ったことを覚えています。

アパートに向かって歩きながら、不安でいっぱいでした。特に夜の奉還町は、今で

村中李衣（むらなか・りえ）
山口県出身。筑波大学人間学類卒業後、日本女子大学大学院で安藤美紀夫に師事し、児童文学を学ぶ。83年同修士課程修了後、創作活動に専念。2004年梅光学院大学教授を経て、2014年ノートルダム清心女子大学教授となる。『かむさはむにだ』（1983年、偕成社）で日本児童文学者協会新人賞、『チャーシューの月』（2013年、小峰書店）で日本児童文学者協会賞、『あららのはたけ』（2019年、偕成社）で第35回坪田譲治文学賞を受賞。日本児童文学者協会会員。

物語が動く瞬間

——『奉還町ラプソディ』というタイトルは、どういう思いで付けられたのでしょうか。

奉還町という名前自体、ものすごく物語性を持っていますよね。お殿様の行列のようなイメージで。そして、ラプソディ（狂詩曲）というしかないような日々が始まったもんだから、こりゃもう歌うように書くしかないなと。

朝、外に出ると、同じアパートのおばあちゃんがスーッと近くに来て「今日は何曜日ですか」って聞くんです。「〇曜日です」って答えると「水曜日じゃないんですか」って聞くから、「違いますよ」って。そしたら「私はどうしたらいいですか」って言うんです。「どうしたらいいでしょうね」って。

またある時には、別のおばあちゃんが道すがら、「うちの庭に咲いたバラです」と言ってぺんぺん草をくれるんですよ。「きれいですね」と言ったら「どうぞ。では先を急ぎますから」っておばあちゃんは去っていく。

——本に書いてあることは、ほとんど実際にあった話なんですね。

そうですね。でも、事実をそのまま書くわけではありませんし、エピソードが溜まったら書けるというわけでもありません。「これは書けるかな」と思ったきっかけのひとつは、通っていた鍼灸院でした。鍼灸院はお灸で壁が黄色くなるのですが、その壁に、掛け時計の跡がついていた。今掛かっている時計とは違う形の、時計の白い跡

でした。それを見た時、これは全体を貫くストーリーの鍵だと思ったんです。私が妄想するタネなわけですよ。

白い跡があるのに、今ある時計は形が違う。外した時計はどこに行ったの？　きっとこれは、鍼灸院のじいちゃん先生に、時を止めたい相手がいたんだな。そう思ったら、恋をしていた先生の青年時代が見えてきた。そして帰りに商店街を歩いていると、種子屋さんに、白い跡と似た形の時計があったんです。時計はここに来たんじゃないか。そう思ったらもう、私はどっちが現実か分からない。「ここで物語が動く！」と思った瞬間、バラバラにあった、今まで見ていたシーンが勝手にシューっと編まれていくんです。

でも、種子屋のおばあちゃんは本当に素晴らしい人格者で、本が出た後も、私が妄想で書いたことはとても言えんと思って内緒にしていました。なのに友人が、「あなたのこと、鍼灸院の先生と恋仲だったという設定で書いてありますよ」とバラしてしまった。私が、「ごめんなさい、創作なので。最後にフィクションですと書いたのでお許しください」と言ったら、おばあちゃんは「いいですよ、いろんなことがありますよね」と言ってくださり、ほほほと笑っておられました。

町の呼吸の中で生きている

——ここで過ごす中で、奉還町が好きになっていったんですね。

村中李衣・文／石川えりこ・絵
『奉還町ラプソディ』（BL出版／2022年）

もう「好き」どころじゃないですよ。この町の呼吸の中で私は生きているんだなと思いました。町には、その町の呼吸がある。それが分かると、今まで聞こえなかった声や、目に入らなかった隙間が、物語を見せてくれるんです。

——『奉還町ラプソディ』の主人公は小学生ですが、お年寄りとの暮らしが多く書かれていたり、外国から来られた方がお店を出していたり。それもリアルでした。

児童文学で、商店街の物語というのは結構あるんです。何か大きな目標のために、老若男女が力を合わせて一つのことを成し遂げるというような、分かりやすい物語が多いのですが、実際に奉還町を見ているとちょっと違う。古くからいる人たちが、新しい若い人たちとシンパシーを持ち合っているとは、あまり思えないですよね。だけど否定はせず、鬱陶しがらず、うまく共存している。つながりが薄いといえば薄い。それが濃くなる物語ではなく、薄いけれど、隣は兄ちゃんのお店、その隣はじいちゃんの店って認め合えるようなものが書きたかったんです。

奉還町は、横並びの一直線の商店街。そこを人が行き来するということ、いろんな人がいて隣り合うということの意味を、象徴的に書ける。真ん中に広場があってそこに集うのが素敵という風潮もあるけど、一直線のアーケード街に良い風がひゅーって通ることもあるし、子どもが自分の速度で駆け抜けていったり戻ってきたり、それがいいなと思って。

——もう一度読み返すと、さらに面白くなりそうですね。

出版後に岡山を去ることになり、本について町の人たちとじっくりお話しする機会がなく、それが心残りでした。だから、今回お話しできて良かったです。

町の呼吸にまき込まれていく喜びを強く感じたのが奉還町でした。この町の呼吸を大事にしてほしい。そのきっかけになれたらと思っています。

商店街ラプソディー

「商店街愛」たっぷりの村中さんが案内する奉還町

突然の訪問に笑顔で迎えてくれた出水松月堂の出水夕加さん

村中さんのインタビューにもあったが、奉還町商店街は、明治維新、廃藩置県により職を失った岡山藩の武士たちは奉還金を手に商売を始めたという歴史をもつ。岡山駅西口から西へ延びる約1キロの街道沿いの奉還町には、かつての「武士の商法」的な雰囲気が少し残っている。

最初に向かったのが「出水松月堂」。老舗の和菓子屋さんです。かつて村中さんが住んでいたアパートの近くで、よく通っていたとか。久しぶりの再会を、店員さんと喜びあっていました。「ここのお赤飯は絶品。何が違うのかしらね。豆がいいのかしら」と村中さん。取材班にもお赤飯をふるまっていただきました。たしかに美味しい！

その近くには、うどん屋「安生」。「ここのデラックスうどん、肉も天ぷらもわかめも、ぜーんぶ入って大盛で、いくらだと思う？」なんと650円だそうです。

ここのランチもおすすめ！と連れて行ってもらったのが、「D'otto café」。素材にこだわった自然食が好評です。

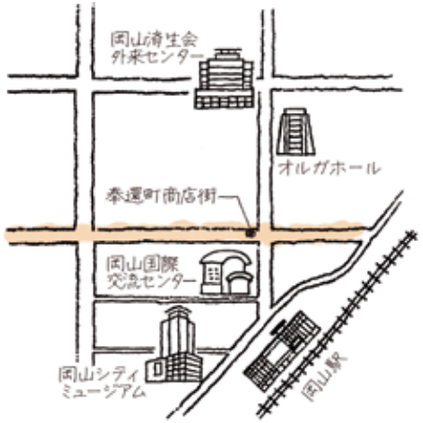
駄菓子屋さん「江陽」のエピソードも素敵です。岡山に越してきた頃、店のかごには折り鶴が入っていたそうで、「でも、首のところはまっすぐで鶴は開いてないの。なんで？って店のおじいちゃんに尋ねたら、最後にお腹をぷっと膨らませて首を折るところが楽しいんじゃから、そこは子どもに残しとるって」と教えてくれました。

「SWASTIKA」や「calico Okayama」などの古着屋さんでも、すぐに店員さんとの談笑が始まります。「これいいんじゃない？」「掘り出し物だよね！」そんなふうに古着選びを楽しんでいたそうです。（黒部麻子）

D'otto café

出水松月堂のお赤飯

仲良しの古着屋さん「calico Okayama」で



奉還町商店街メモ

岡山駅西口から西へ、旧街道沿いに形成された商店街。1丁目から4丁目まであり、その距離約1キロ。明治維新の廃藩置県によって職を失った武士たちは、奉還金を手に自ら商売を始めることにした。奉還町で最初に店を出したのが「奉還モチ」を売り出した餅屋だという。その繁盛ぶりを耳にした武士たちが集まり、うどん屋や荒物屋など次々と店を構え、士族ばかりの商店街ができあがった。ところが、頭の下げ方も知らなければ、お愛想のひとつも言えない商売人が多く、客から愛想をつかされたというエピソードも。

まんじゅうラプソディー

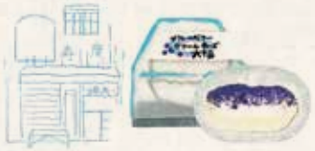
声を大にして叫びたい。「岡山の奉還町商店街には、でーれー美味しいまんじゅうが、ぼっけー沢山あるの知っとるー？」と。

学生たちの通学路、または地元住民の生活に密着した買い物の場としてのイメージも色濃い奉還町商店街。ノスタルジックな店構え。手のひらサイズの愛らしいフォルム。アーケードの名品まんじゅう達は、それらの風景にとけ込みすぎて、ときに息をひそめがちにもなっている。けれど一度、探し歩いて、食べてほしい。そこには宝もののような逸品が待っているのだから。

奉還町商店街の中でも、とくに4丁目界隈は和菓子の老舗店が集約されているのだが、もしかしたら気づく人は少ないかもしれない。なぜなら奉還町は3ー4丁目間を岡山市道いずみ町青江線がぶっつり分断するので、奉還町ビギナーの人は3丁目までを歩いて、「ここで商店街は終わり？」と引き返す人も多いとか。しかし4丁目まで邁進してほしい。

栗娘
金福菓子舗
100年以上引きもばれる大正からのロングセラー

梅ひとつぶ
出水松月堂
3種の食感・風味の違いを楽しんで!



ブルーベリークリームチーズ大福
寿庵
和菓子が苦手なんや男性のウケも良さそう!

バター大福
いなか家
バターの香りが楽しめるよ。お弁当でも人気のお店。

【金福菓子舗】は大正創業の老舗店で、銘菓「栗娘（くりっこ）」は、大きな栗がひとつぶゴロンと入り、大臣賞も受賞した自慢の品。その美味しさと歴史の深さは、店内に掛けられた大正時代の賞状や当時の店舗写真からも感じられるロングセラー品だ。

そこから西へ20m程の【出水松月堂】も三代目店主が営む趣深いお店で、「梅ひとつぶ」シリーズは、先代が食感にこだわって考案した人気の品。現店主・夕加さんが大切にするのは「昔からのお客様にはもちろん、子供や若い人にも和菓子を楽しんでもらうこと」で、先代から受け継ぐ味を多くの人に伝えるためにマルシェなどの販売イベントにも精力的に出店している。

さらに西へ20m程の【寿庵】も創業100年以上の餅・和菓子の店。注目は洋の味わいも楽しめる「ブルーベリークリームチーズ大福」で、果実の美味しさと大福としての食べやすさを両立するために試作をくり返してたどりついたおすすめの一品。老舗の伝統を三代目店主として兄妹で引き継ぐ中、お兄さんの慧さんが現代的で新しいセンスで編み出したこだわり光る自信の一品だ。

奉還町で唯一、立地がわかりやすいのは2丁目【いなか家】。「おはぎ店」として創業し約15年。現在の自慢の一品は、柔らかい生地と食べやすさにこだわった「バター大福（いちごあん）」。苺を練りこんだ自家製あんが包まれた人気品だが、実は要望により始めた「弁当」も好評すぎて、取り扱う弁当は現在常時6〜8種類。市内7箇所への弁当配達も大好評で、「弁当屋」だと思っている人もいるかもしれないが、まぎれもない和菓子店としてスタートしたお店だ。（藤若真里）

寂しい感じに惹かれた古着屋

奉還町商店街（西国街道）を西へ進むと急に薄暗くなるエリアがある。「奉還町3丁目商店街」だ。シャッターが降りたままの店が増える。見上げたアーケードは錆びている。「終わり」という言葉が脳裏に浮かぶ。

「その寂しい感じが却ってよかった」。古着屋Get2（ゲッツー）店主の山下純平さん（25）は、奉還町3丁目商店街の静かな雰囲気とゆっくり流れる時間を気に入った。

「（生まれ故郷にある）尾道本通り商店街に似ていると思った」。

山下さんは、ここで開業したいと物件を探し始めてから、シャッターが閉まっているというのに貸し出されている店舗がないことに気が付いた。廃業したものの店舗の2階で生活をしている元店主が、生活空間である建物の1階に誰かが入るのを嫌ったらしい。

山下さんは、仕方なしに大学エリアでも物件を探したけれど、奉還町商店街を諦めきれなかった。奉還町商店街がJR岡山駅から近いこともあり、電車で来てくれる学生のことが頭をよぎるからだ。

たまたま通りかかった友人が空きテナントを見つけ、不動産屋に問い合わせ話が進んだ。空きテナントが見つかること自体奇跡に近かった。

Get2は2022年11月に開業し、今年2周年を迎える。

古着屋は奉還町商店街全体で見ると6軒ある。「ストリート系」であるGet2が、他のコンセプトで売っている古着屋と交流があるかというと、さほどあるわけではない。それよりは、Get2オリジナル刺繍を手掛けるOne Scene（ワンシーン）や裾直しなどを手掛けるLOBBYとは、仕事の繋がりで交流がある。

山下さんが、ちょくちょく訪れるアパレル店舗としては、スケートショップJAROW STORE（ジャロウストア）が奉還町3丁目商店街から少し逸れたところにある。スケボファッションとストリート系ファッションはテイストが近いこともあり、山下さんはよく訪れるらしい。

山下さんの話を聞いていると、奉還町商店街には若者が集まり、新しく商売を始めていることを知ることができる。降りたシャッターにも光は射していて、健全な入れ替わりが続いているのだ。（岡村由紀子）

小さな喫茶店「マキ」

奉還町に住んでいた時、近所に気になるお店があった。「小さな喫茶店マキ」。目を引くのはその外観だ。ハーフティンバー風の壁面は、よく見ると木材が「マキ」を表す「MK」のデザインに組まれている。柱や梁にはアフリカ風のデザインが力強い木彫で施されている。美しい瑠璃色の釉薬を使った洋瓦の庇にガラスブロックの出窓、その基壇は焼き締めレンガを積む凝った デザイン。

当時若かった自分は中々このお店に入れなかったが、ある時思い切って入ってみた。薄暗い店内、タバコの煙がくゆる中、地元の年配の方々がモーニングをいただいている。狭い店内だが、カウンターとテーブル席があり、いずれも重厚な木材を使ったオリジナルの設え。そしてそこにも表で見たのと同じモチーフの木彫レリーフが施されていた。内外一体となったこの質の高い空間はいったいどうして生まれたのだろう。

何度か通ううちに、店主である奥様から話をうかがうことができた。かつて、ご主人と一緒にこのお店を開くときに装飾を依頼したのが、新進気鋭の彫刻家、寺田武弘さんだったのだ。現在は万成石の石彫で有名な寺田さんだが、当時は木彫家だった。奥様は、その頃まだ運行していた西大寺軽便鉄道に乗って、原尾島のアトリエに進行状況を見に行った時の話などをしてくださった。このお店の謎が解けたような思いだった。この「小さな喫茶店マキ」そのものが外観、内装、インテリアを含めトータルな寺田さんの作品だったのだ。

その後、お店は奥様がやめられた後、しばらく親戚の方がされていたが、現在は別店舗になっている。「小さな喫茶店マキ」の看板やアフリカ風の彫像は今はなく、内部は知る由もないが、外観は比較的面影をとどめ、現在のお店の表示に隠されながらも、木組みに施されたレリーフや「coffee」の文字が垣間見え、かつてをしのばせている。

「木彫家」寺田武弘としての、彫像ではない、建築として残されている貴重な芸術作品であり、文化財。そのようなものが通りのなかにひっそりとさりげなくある、それが奉還町商店街だ。（阿部泰久）

「日常」に寄り添う場所

「みんな言うのは、人がひしめきあっていたってこと」奉還町商店街の一角にある、本の森セルバ西口店に勤務する森田麻住さんはこう語り始めた。数

多の専門店が軒を連ね、多くの人で賑わっていたこの場所に、かつての活気はない。お店の入れ替わりは激しく、現在は空き店舗が目立つ。長く商売を続けているのは、遠くに買い物に行けない年配のお客さんが通う店だが、後継者がおらず店舗を畳むしかないという話も耳にするという。

しかし、森田さんは商店街の存在に助けられたことが何度もある。配達に使用しているオンボロ自転車を「戸田屋自転車店」の店主は、時間も費用もかけずに直してくれた。商店街の外にある店では難色を示されたものだった。動かなくなった時計を「ナカダヤ」に持っていくと、その場ですぐに電池交換してくれ、その後も問題なく使っているという。

職人たちが長年の経験で培った確かな技術は、暮らしの中の困りごとを瞬く間に解決してくれる。弾む声で教えてくれたのは、時々利用する飲食店のランチ情報だ。「cafe kurumi」は一階が喫茶で、二階が食事スペースになっているが、一階では今なお煙草が喫えるという。ちなみに、だしの利いたお味噌汁が絶品らしい。

国体町にある「奥の細道」もおすすめだ。三十年間値上げなし、ランチが550円という驚異の価格を守り抜いていて、財布に優しく何よりおいしいから、つい足を運んでしまう。店舗同士の深い付き合いはないが、互助の精神で助け合っている。それは、おまけを貰えばスタンプを多めに押すなどのささやかなものだが、踏み込みすぎない距離感は、健全に店を運営するには必要なものだろう。かつて「ハレ」を担っていたここは、時を経て「日常」に寄り添う場所になった。試練と受難を乗り越えた底力は、街と人で生み出してきたものだ。商人たちがつないできたこの場所で、深く息して暮らす心地。今、私たちに本当に必要なものは商店街にある。（横田かおり）

商店街に潜む水路の謎

農業用水路が多い岡山県南の平野部では人や車の転落事故が多発し、しばしば問題となっている。そんな厄介ものの用水路をちゃっかり利用している商店街があるのをご存知だろうか。

ある日、奉還町商店街の3丁目を歩いていて、ふと奇妙なことに気付いた。東西に走るアーケード街の北側店舗だけが、なぜか一様に一階部分がせり出して二階が同じ奥行で引っ込んで建っているのである。多少の例外を所々に挟みながら、こんな家並みが概ね200mほど続いている。

さらにこの妙な家並みの途中で、わずかな水路の開口部を見付けた。そこから類推するに、どうやら各店舗の張り出し平屋部分の下には幅約2mの用水路が商店街の道に沿って流れているようだ。

調べてみると『岡山市百年史下巻』（岡山市発行、1991年）にその事情が記されていた。いわく、奉還町3丁目商店街の道筋北側には以前から用水路が流れており、商店は南側にのみ並んでいた。岡山市が太平洋戦争の空襲で被災した後、引き揚げ者や復員兵らがこの用水路の上にバラック建ての店を作り72店舗もの闇市を開いた。その後、用水路に隣接する土地（当時、国鉄用地だった）を岡山市が仲介して各店舗に払い下げる処置をしてセットバックさせた、と。

そんな水路上店舗の一つ、和菓子店「好月堂」（創業1955年、閉業2013年）を夫婦で営んでおられた元家里實さん（78歳）にお話を伺った。こちらは元々建っていた家屋を先代が購入して開業した店なので闇市とは関係ないが、店頭のコンクリート土間だった部分の下は確かに水路だそう。水路に面したどの店も、お客さんが入店しやすいよう水路に石や木で蓋をしていたが、やがてどうせ空いているなら店に使ってしまおう、と現状のようになったのだという。建替えない限り、既存建物として役所からも大目にみられているのだとか。

岡山県南では水路上に張り出す古い家屋に時々遭遇するが、商店街のかなりの長さが軒並み水路上というのは他に例がないだろう。わずか一間ほどとはいえ、岡山市中心街でこの〝勝手増築〟は実におおらかで面白い。（福田忍）

つながる物語・三門（みかど）だんご

「三門だんご」はみずみずしく、ものすごく美味しい、こし餡にくるまれたヨモギの餅だった。4月になって、久しぶりに会った知り合いが、「三門だんご」2箱を大事そうにカバンから出してくれたのだ。以前、山陽新聞の滴一滴（2023年4月26日）を見せて「三門だんご」を話題にしたものだから、奉還町を歩いて探したのだという。ずっしりと重みがあり、それだけで気持ちが伝わるようなお土産。美味しさは折り紙付きで、参勤交代の大名が美食されたお菓子で、静岡の「あべかわもち」に並ぶお国自慢・三大名物の一つとのことだ。

余談になるが、昭和時代の商店街の和菓子屋さんというと、小学校では入学式・卒業式などになくてはならない紅白饅頭を注文していた。どの学校にもなじみの地元のお店があり、「紅白、注文した？」と言いながら行事の準備をしたものだった。白とほのかな桃色をした紅白のお祝い饅頭は、ある世代の思い出の中にある和菓子だ。

さて、1989年には「三門だんご」という名前の人形劇団が発足する。お尋ねすると「名前の由来は江戸時代の大名のお菓子から…」という話であった。手作りの人形劇を5、6人で演じることをメインに続けておられたが、コロナ禍でひと休みをして、3人くらいで再始動しているという。

事務局は三門の國神社前、奉還町商店街の北西にある「お茶の立石園」内にある。「人形劇団　三門だんご」の主要演目は「嫁が見たらひきんどになれ」（岡山のむかしばなし）、創作童話「おかやま新しゃちほこ物語」（岡山城400年記念市民公募事業―岡山遊楽彩―で採用）など。30㎝くらいの自作の人形を操って演じられてきた。「体力がいるけれど、演じると気持ちが入って元気がでる」と、教えてくださった。地元の三門小学校をはじめ、市内の学校図書館で披露していただき、学校司書たちも知っている劇団である。

商店街は、くらしと文化を結び、ゆったりほっこり、物語をつないでいく。「三門だんご」を求めて奉還町をぶらり歩いてみませんか？（学校図書館を考える会・おかやま／後藤敏恵）

＊「三門だんご」は、春3月～6月と秋10、11月につくられる季節のお菓子です。

故郷・ネパールの姿を重ねて

「大好きな奉還町商店街を盛り上げて、日本人と外国人が交流できる場所を作りたい」。ネパール人のバスネットさんはそう話す。火曜限定で奉還町のユースセンターを間借りし、ネパール家庭料理店を協力者の江見優子さんと始めた。

「奉還町はそこに暮らす人たちが、自分たちがより良く暮らすために話し合います。そこがネパールとも似ている。人と人のつながりが強く、何気ない会話をしながら助け合うこの町が気に入っています」

バスネットさんは在住21年。レストラン2店と食品店を経営する傍ら、通訳を無償で引き受けるなどネパール人コミュニティの兄貴分だ。いずれ奉還町にも店を出したいという。

ヒジャブをまとい自転車に乗る女性や、スーパーで買い物する外国人グループを見ることが増えた。バスネットさんによると、岡山市内のネパール人は約600人。全体から見ると少数だが、留学生が増加。「日本人と交流せずに帰国する人もいます」と残念そうに話す。

家庭料理のダルバートは、ダル（豆スープ）とバート（ターメリックライス）にカレーなどが付く。派手さはないが、野菜や豆が豊富で、クミンの香りが食欲をそそる。一般は800円で、学生は500円だ。

バスネットさんは、商店街を通る留学生とも気軽に話す。「例えば、故郷では、故障した車があれば、人が集まりどうすればいいかみんなで解決します。知らん顔はしません」とバスネットさんの表情が緩む。

実は、日本中にあるインド料理店の大半は、出稼ぎのネパール人が作る。バスネットさんも、大学近くでインド料理店を開き成功させた。それまでは運送業で長く働き、同僚との付き合いから、細々とした日本のルールを覚えたという。「もちろん外国人として大変なことはありましたが、助けられたこともたくさん」。

「ダルバートを毎日食べないと元気が出ないよ」。日本に来たばかりのネパール人と日本の架け橋となろうとするバスネットさんの思いが滲むようだ。（頼實鮎美）

まちとデザイン

デザインで街の心を変える？

―中之町のロゴマーク―

田中雄一郎　グラフィックデザイナー／ブランディングディレクター

2020年、表町商店街の中枢をなし、400年以上前、宇喜多秀家による岡山城築城とほぼ同時に生まれた商人の街・中之町（商店街）のロゴマークやポスター、フライヤー、ショッピングバックなどのビジュアルデザイン全般を担当した。

ロゴマークは「中」の文字をモチーフに、先人たちが築き上げてきた歴史に、新たな歴史を足すという「+」、お客や商人たちとの出逢い創出の場であり想いが「クロス」する場であること、また「商人の街」として新たな「扉を開く」様子を表現している。また中之町で繰り広げられる日常の物語が上演される舞台・劇場に見立て、「お客様に新たな価値と、たくさんの『うれしい』『たのしい』をプラスできる『商人の街』としてあり続けたい。」という願いを込めている。

街にロゴマークが必要な理由は二つある。一つは自分の住む町に対して愛着を感じ、誇りを持ってもらい、街が一つにまとまること。ロゴマークは家で言えばいわば家紋と同じある。家紋は平安時代に自分の牛車に家のしるしとして、鎌倉時代からは合戦の時の敵味方の区別をつけるために旗印として使われていた。つまり自分の所有財産や帰属意識の証として使われている。ロゴマークがあることで、この街は自分の街であり、自分はこの街の住民である、ということを一人ひとりが排他的でなく誇りを持ち、自覚するだけで街の秩序や文化力は向上するのではないだろうか？またロゴマークという旗印の下、街として一体となって発信していくことで、より強固な発信力となるのではないだろうか？

二つ目は街の魅力をより多くの人に

伝え、来訪してもらうきっかけづくりだ。街の価値や潜在性を視覚的に表現できるマークがあることで、広報活動がしやすくなる。中之町の場合はブランドマークと合わせてメッセージコピーを掲載したポスターやショッピングバッグ、マークを象ったフライヤーやギフトカード、またブランディングの想いを記したコンセプトブックなどトータルにデザインすることで独自性や統一感も出て認識してもらいやすくなり、街のイメージ向上に繋がった。

若くて感度が高く、向上心とこだわりを持って商売をしている店主やその理念や価値観に共有してくれるお客が増え、近隣にできた大型商業施設との差別化やオーナー及び店主の高齢化による空き店舗増大の問題など、多くの問題を解決できる糸口にもなったという。

これら二つが有機的に結びつけば、店舗間でも社会的にも中之町の価値を共有することができる。ビジュアルデザインの効力は見た目や形をきれいにできるだけではなく、人の心までもつなぐ（共有する）ことができる点にある気がする。実際中之町でもロゴマークで古参の店主たちの意識も変わってきた。若い店主たちとのコミュニケーションのきっかけになったり、今まで意思の疎通が図りにくかった店主同士がロゴマークについて会話することで氷解する場面もあったという。

正直デザインにより劇的に各店舗の売り上げがあがるものでもない。しかし中之町の人間模様やまちの風景が少しずつ明るくなってきていることは確かなようだ。そして中之町のように小さな町単位で質を上げていけばその集合体である市町村や県、ひいては日本全体の質も向上するだろう。持続可能でもあるこの図式こそが今後の街づくりに不可欠な概念ではないだろうか。

ZINEからはじまる岡山の旅

ムサシノ工務店『昭和街道』シリーズ

根木慶太郎　451ブックス店主

ZINE（ジン）とは、個人またはグループで発行する自主的な出版物。作者の個人的な思いや趣味、考え、主張を反映した内容をまとめ、家庭用のインクジェットプリンター、コピー機やリソグラフ、ネットプリントなどで印刷し、小冊子にしたものが多い。

今回紹介するZINEは『ムサシノ工務店』という名称で、岡山に住む武部将治さんが発行している『昭和街道シリーズ』。今回、武部さんにインタビューしてみた。

「昭和街道」はどのようなきっかけで作ろうと思いましたか。

直接のきっかけは、2011年に発生した東日本大震災です。地震から少し経って、防災に対する人々の見方が変わり、昔から残っていた古い建物が解体されたり、昔ながらの狭い町並みが区画整理でなくなっていく姿を見て、日本中に残っている今しか見られない、もうすぐ消えてしまう風景を見てまわりたい、と思い、あちこち町歩きをするようになりました。その際、撮った写真の一部を同人誌にしている感じです。

「昭和街道」を作る前にはどんな活動をされていましたか。

元々は廃墟マニアとして、主に日本各地に残る鉱山跡を巡って写真を撮っていました。

若い頃、初めてもらったボーナスでニコンの一眼レフを買い、廃墟巡りを始めたのがそもそもの活動の始まりです。

「昭和街道」の被写体はどのような基準、感覚で選ばれているのでしょうか。

商店街のある町、鉱山町、河川港、宿場町、繊維で栄えた町、古い企業城下町など、おおむね昭和50年代くらいまで賑やかだった町、そんな場所を中心に町歩きをしています。

1巻目の『特集 消える商店街』は、昭和の風情を残す商店街を「10年後にはなくなる風景」としてコレクションした一冊。

表紙の商店街は、京都府福知山市にある商店街。シャッターが下りた店舗も多く寂しさは否めないが、アーケードを含め、道路の舗装もお店も、今でもメンテナンスされ、大切にされていることが分かる。

表紙をめくると現れる看板建築（洋風のレトロな外観を持った店舗併用の都市型住居）の外壁はモルタルにヒビが入り、一部は剥げ落ち、下地の木材が露わになっている。

アールデコを模したような階段状の外観は、当時の華やかさを連想させるが、外壁中央は、ペンキの剥げた跡が錆び、そこに微かに商店街の名称が判読できる。対照的に、ヒサシで雨に守られたからか、下部にある「明るい商店街」の文字が欠けることなく残されている。

ページを進めていくと各地の商店街が掲載され、銭湯や映画館、薬局、服飾店、書店、電器店、眼鏡店、食料品店、金物店、食堂などが並ぶ。

時代に取り残され、改装や取り壊しをのがれた建物は、当時の面影を持っている。時間の流れを感じさせるのは、古びた外観だけでなく、その個性的な外観を作った当時の大工、看板屋、左官などの職人の腕によることが大きい。

4巻目の『思ひで観光地』の表紙は、岡山市北区にある最上稲荷の商店街。土産物が並ぶ店頭や、壁や天井につけられた看板は、岡山人にとっては初詣などで馴染み深く、年末年始に並ぶ屋台などの思い出も多くあるような場所になっている。意外とじっくりと眺めることのないこの風景に、かけられた手間や営む人たち、積み重ねられた歴史が見えてくるかもしれない。

紹介されるひとつひとつの建物に、現代の商業空間ではあまり感じられなくなった、造り手のかけた手間や作業、それぞれの店を営む人の姿が浮かぶ。ただ、掲載された建物の中には、既に撤去されたものもあり、残念ながら近い将来消えていく建物もあるだろう。

ゲニウス・ロキという言葉がある。建築などで使われる「場所の精霊」という意味であるが、空間認識概念として位置付けられている。

【書誌データ】
タイトル：
昭和街道　特集 消える商店街　日本全国古い町並みめぐり1
昭和街道　特集 高密度建築群　日本全国古い町並みめぐり2
昭和街道　特集 老練ビルヂング　日本全国古い町並みめぐり3
昭和街道　特集 思ひで観光地　日本全国古い町並みめぐり4
昭和街道　特集 旧市街は誘う　日本全国古い町並みめぐり5
著者：武部将治／発行：ムサシノ工務店

「場所の精霊」というとスピリチュアルな意味をでっち上げるケースもあるが、これを形作るのは、地形の特質を踏まえ、その地や周辺の人の振る舞いによって空間に残された痕跡から、「場所の意味」を受け取る我々自身である。

「岡山」という場所にこだわる限り、場所に積み重ねられた痕跡を抹消することはできない。ただ新しいものを作るのではなく、歴史の記憶や、場所の意味を、痕跡としてでも伝えていくことが、我々自身のために必要なこと。

記憶から消えていきつつある「場所の精霊」を、武部さんは岡山だけでなく、日本各地で出会った昭和を感じさせる建物や風景を撮りため、『昭和街道シリーズ』として刊行しているようにも思う。

武部さんのZINEをひとつのきっかけとして、忘れられていく商店街などの「場所の記憶」が「共有する記憶」となり、これからも維持され残されていくことを見守りたい。

続編等を作られる予定はありますか。またあるとするとどのようなものですか。

「昭和街道」は現在5号まで刊行していますが、第6号を今年10月ごろに刊行予定です。テーマは映画館のある町です。いつの間にか映画はシネコンで観るのが普通になりましたが、かつては日本中に映画館があって、町の文化の一翼を担っていました。

今でも古い映画館が残る町には、映画館だけでなく昭和の雰囲気が残る独特の風景が残っています。

そんなわけで、この夏は古い映画館を探して町歩きをしています。

エッセイ

物語の始まりそうな川景色——建部井堰

小暮夕紀子　作家

国道53号線を建部町福渡まで北上し、八幡橋を渡ったら、旭川に沿ってさらに進む。うだるような暑さは夕方近くになっても一向に収まらず、効きの悪いカーエアコンを励ましながら「建部井堰」を訪ねた。

全長650メートルで国内最大。江戸期初めにはすでに完成していたとされる農業用石造取水堰は今なお現役で、昨年十一月、世界かんがい施設遺産に認定された。ふだんイノシシは現れても人影はまずなさそうな川辺を、新聞等が大々的に紹介した。十分注目に値することではあるが、地元の人にとっては昨日までのあり様と何かが変わるわけでなく、特別大騒ぎになっているふうではない。とろとろ車を走らせる私に、畔草刈りの老人が「なんの用じゃろうか」とばかりに、麦わら帽子の下から視線を投げた。

人家を離れ、田畑も過ぎて、しばし山道を行くと緑陰の中に駐車場がある。湿った山土と蒸された葉緑素のにおい。ジジジジジと切れ目のない蝉しぐれ。その向こうの瀬音。

ここに来るたびに、この川景色、私はやっぱり好きだなあと思う。なんら偉ぶることもなく、いつも通りここにある、そのことがほっと嬉しいと言うべきか。

県北で雨が降ったせいで、水量はかなり多い。本流と別れて取り込まれた水が、導水路の横幅いっぱいに、取水口に立つ私のもとにやって来る。いきなり水の世界に降り立った感覚だ。暑さに萎えたからだは、今この水に飛び込めたらどんなに気持ちいいか、と前のめりになるが、水底は見えず、泳ぎにも自信はない。水際にしゃがんでみた。川のにおいとともに微かな風が立ちのぼり、頬の火照りをなでていく。冷えた微粒子がしみ込んで、水流となって体内をりゅうりゅうと巡る……

そんな妄想の中で心身はゆっくりクールダウンされていく。

私と同じ格好で草木も身を乗り出し、水面には緑の影を映す。常緑樹はもくもくと茂り、その底に白い空が光る。足元のハゼの葉は端正な形を静かに保ち、ヤマハギは背後から伸び上がって小さな紅紫色を散らす。その水鏡は写実絵画さながらだ。風が来れば水面は波打ち、かき乱れたあと、またも一幅の絵に戻る。その繰り返しは見飽きることがない。

ここから始まる用水が約七キロにおよぶ「大井手用水路」を形成し、建部の郷を長きにわたって潤してきた。玉石を布石するなど水の抵抗を考慮しつつも、なるべく多くの水を得られるよう技が尽くされている。当時は旭川の真ん中が備前と美作の国境だったため、中心線からはみださないことも絶対条件だった。ゆえにこの堰は斜めに伸びた「片持ち式」となっているのだが、残念ながらここからその全景は見渡せない。

パンフの航空写真を見たとき、スケールの大きさはもちろん、その形に私は改めて驚いた。巨大な爬虫類が臥せっている姿に見えないか。先端部の捨て石が水に見え隠れする部分は、しっぽの先だ。冬枯れの時季は石色の痩せたしっぽだが、草が青々してくると少し太くなる。我が身を賭して、人々のために——この種の物語は子どものころいくつか読んだ気がするが、もしかすると建部にもちょっとせつない、あるいは滑稽なお話が潜んではいないか？　そんなふうに考えてしまうのも、しっぽの先のうねり具合、美作側にご機嫌伺い風のこのかわいらしさに、単なる構造物を超えた「思い」が感じられるからなのだが、どうだろう。ここだけでなく、岡山には、恵みの水と、物語の始まりそうな川景色が豊富にある。

気づけば、蝉の声の主流はヒグラシに変わっていた。車の計器によると外気温はまだ三十五度を超えているが、私はすくっと背筋を伸ばす。

帰り道、小さな田んぼの隅々まで水に満たされているのが目に入る。土用干しを終えて、これから再びたっぷりの水が必要な時期になる。老人がちょうど腰をあげたので、軽く頭を下げてみたら、会釈を返してくれた、ような気がした。

地元の人たちは、ずっと前から、井堰の補修や掃除を続けているというのを後日知った。（了）

世界かんがい施設遺産に認定された建部井堰
写真・友谷清志

【執筆者プロフィル】

●乗代雄介（のりしろ・ゆうすけ）
作家。1986年北海道生まれ。法政大学社会学部メディア社会学科卒業。2015年「十七八より」で第58回群像新人文学賞を受賞し、デビュー。2018年『本物の読書家』で第40回野間文芸新人賞受賞。2020年「最高の任務」で第162回芥川賞候補。2021年「旅する練習」で第164回芥川賞候補、第34回三島由紀夫賞受賞、第37回坪田譲治文学賞受賞。2022年「皆のあらばしり」で第166回芥川賞候補。2023年「それは誠」で第169回芥川賞候補。2023年から岡山市で「おかやまライターインレジデンス」に伴うワークショップの講師を務めている。

●山口裕喜（やまぐち・ひろき）
1971年岡山市生まれ。早稲田大学人間科学部卒業。NGO団体職員、専門紙記者、コピーライター、塾講師、筋引き職人、韓国語通訳、ラーメン店店員、韓国宮廷料理調理スタッフ、出版社営業、運行管理者、パチンコ店従業員、バー店員、タクシー運転手、大型トラックドライバー、コンビニ配送員、補聴器販売員など、転職回数数十回。第一回「実話ナックルズ」文芸賞・優秀賞受賞。

●茉莉亜まり（まりあ・まり）
岡山市生まれ。岡山大学文学部心理学・社会心理学コース卒。心理判定員を経て岡山出身の川柳作家時実新子の川柳に出合い文芸の世界へ。2008～2021年編集者であり新子の夫であった大野進創刊の川柳誌『現代川柳』編集部兼執筆陣。句集『あやふやな月』（編集工房円）。句文集『雫が海となる神話』（左右社）。zine『picoluna』『mimosa』等。FM宝塚「川柳の時間」。みのおてならい川柳講座講師。

●阿部ゆきの（あべ・ゆきの）
1988年ノートルダム清心女子大学家政学科卒業。文章校正、映像アーカイブ・公開展示などの業務を経験。2019年にデジタルアーキビスト資格取得。趣味は岡山市内の町歩き。昭和30年代の新聞記事をもとに、旧町名の名残りをとどめる風景を記録している。「新しい『地域創成の物語』発見の会」メンバー。

●岡田智美（おかだ・ともみ）
1972年生まれ。小学校卒業まで広島市で育ち、中学入学以降、岡山市で暮らす。岡山大文学部哲学科（美学美術史専攻）卒。94年山陽新聞社入社。通算20年余り文化部に所属し、「地域とアート」を主なテーマに取材活動を行っている。

●三村佳代子（みむら・かよこ）
1963年生まれ。大学卒業後、（株）アラス（現ビザビ）タウン情報おかやま編集室入社。退職後フリーランス、編集プロダクション勤務を通じて、旅行雑誌や企業情報誌など出版物の取材・執筆、編集業務に携わる。2017年に酒販店「酒のみむら」を表町に開業。2023年に店舗の隣に小さなシェアスペースをオープン。著書に『食と農を訪ねて』（吉備人出版）。

●藤若真里（ふじわか・まり）
1979年岡山市生まれ。中国デザイン専門学校卒業。自宅にてマイペースにイラストや広告の仕事を営む。小さい頃から本が大好きで、活字を読むところが落ち着く。地元新聞の読者紙面への文章投稿歴18年。趣味は友達との畑づくりと、張り子（はりこ）づくり。

●岡村由紀子（おかむら・ゆきこ）
1972年大阪府茨木市生まれ。龍谷大学法学部卒業。20代は新聞記者や編集者を経験し、「30歳からは小説家だぜ！」と退職したものの、すぐに就ける職業でもなく、生活費はこの20年間税務で得ている。公益社団法人日本ラクロス協会運営ウェブサイト『Lacrosse Magazine Japan』ライター。自費出版「うてるす」『つきのなみ』『たゆむ糸』刊行。

●阿部泰久（あべ・やすひさ）
1963年生。岡山大学教育学部卒業。中学生の頃より城跡や古墳、古い町並みを自転車で巡り、長じて郷土史、考古学、建築、町並みに興味をもつ中学校社会科教員となる。高校で演劇部だったことをきっかけに、中学校では30年間演劇部顧問を務め、松本ヒロ西大寺公演では10年来スタッフを務める等、演劇との関りは深い。

●横田かおり（よこた・かおり）
1986年総社市生まれの水瓶座。岡山市在住。本の森セルバ岡山店で文芸書、児童書、学習参考書、郷土本を担当。一万円選書「ブックカルテ」参画。「書店員が選ぶ絵本新人賞」選考員。光文社「本がすき。」講談社「tree」サイト「この一冊、あなたに届け！」ブックレビュー連載。乗代雄介氏「風景スケッチ講座」一期生。おかやま旅筆会所属。

●福田　忍（ふくだ・しのぶ）
1958年東京生まれ。1987年配偶者の仕事の関係で縁もゆかりもない岡山に移住。岡山の史跡に興味を持ち、図書館等で調べては身近な史跡を見て歩くようになる。2008年より手作り冊子（Zine）「おかやま街歩きノオト」を作成・発行。現在までの通算号数は25。ほかに、2015年1月から2018年3月まで毎日新聞地方版にコラム「街を歩いて毎日が観光」を掲載。

●学校図書館を考える会・おかやま
2018年4月設立。「学校図書館の役割などについて学び、知らせ、充実する」ことをめざし、市民、研究者、作家、教職員などの有志で集まって活動。市民との学びと交流の場「市民フォーラム・学校図書館」を同年9月に開催、記録集を発行。以降、学びとおしゃべりの広場「学校図書館カフェ」を継続開催。会員14名。

●頼實鮎美（よりざね・あゆみ）
1980年大阪府生まれ。文化人類学科卒業。大学を1年休学し、インドネシア政府留学生として語学留学。大学卒業後、ジャカルタの日刊邦字紙に入社。販売促進部を経て、生活や文化担当記者職。2007年、姫路の生活情報紙に入社。結婚を機に、岡山県早島町に移住し、フリーライターとして現在に至る。関心のあるテーマは、日本の中の外国人、福祉など。

●田中雄一郎（たなか・ゆういちろう）
グラフィックデザイナー、ブランディングディレクター。1975年岡山市生まれ。立命館大学理工学部卒業後、都市計画コンサルタントを経て、2004年QUA DESIGN style設立。同時にデザインを独学。岡山を拠点に北海道から沖縄まで、教育・医療機関、公共施設、美術展、商店街などのブランディングを手掛ける。共著に「ロゴデザインの現場事例で学ぶデザイン技法としてのブランディング」（MdNコーポレーション）

●根木慶太郎（ねき・けいたろう）
1960年岡山市生まれ。広島工業大学建築学科卒業後、住宅会社に勤務。その後専門学校で建築やCGなどの教鞭をとる。2005年玉野市に「451ブックス」を開店。新刊書籍、古書、洋書、ZINEなど自らセレクトした本を販売。旅する本屋としてBOOK VANに乗り各地イベントに出店。「大人のための絵本講座」などの教室も開催。「おかやま文学フェスティバル」を岡山市と主催する「瀬戸内ブッククルーズ」代表。

●小暮夕紀子（こぐれ・ゆきこ）
作家。1960年岡山県生まれ。岡山大学卒業。フリーライターであった2000年に絵本『蚤のおくりもの』を出版（吉備人出版）。2018年、第4回林美美子文学賞を受賞し作家デビュー。『タイガー理髪店心中』（朝日新聞出版）、『潰物大明神』（ふくろう出版）ほか、『ベスト・エッセイ』（日本文藝家協会編）に採録のエッセイ等がある。岡山市北区にて洋画家であった父親の絵を展示した「佐藤定油彩・ミュージアム寒の風」を主宰。日本文藝家協会会員。

【編集スタッフプロフィル】

●奥山太貴（おくやま・たいき）
1988年岡山生まれ、東京在住。アートディレクター／デザイナーとして文化芸術の領域で活動する傍ら、グラフィックアーティストとしてアニメーションやインスタレーションを制作、国内外のコラボレーターとともに作品の発表を行う。また、地域や農業の課題に取り組むいち農家でもある。

●加藤晋平（かとう・しんぺい）
写真家／加藤晋平写真事務所代表。1976年生まれ。神奈川県出身。大学卒業後、専門学校で写真を学ぶ。カメラマンアシスタントを経て、2003年無印良品の撮影室に入社。2009年に退社独立。2011年、東日本大震災をきっかけに岡山市に拠点を移す。現在は、住宅・家具・プロダクト・ポートレートなどを中心に、断続的に作品制作にも取り組む。

●eri.kubo（くぼ・えり）
1985年香川県生まれ。女子美術大学短期大学部専攻科彫塑専攻を卒業。社会人になり改めてデザインを学び、イラスト主体のデザインで県内外のライブフライヤーやグッズ等作成に携わる。2024年イラストレーターとして本格的に活動開始。パンフレット挿絵や女子美術大学同窓会岡山支部の会報誌では挿絵構成編集等に携わる。

●黒部麻子（くろべ・あさこ）
フリーライター／エディター。1981年東京都生まれ。早稲田大学法学部卒業後、出版社に勤務。東日本大震災をきっかけに岡山県に移住しフリーランスに。取材、執筆、編集のほか、地域活動団体の広報や映画制作にも携わっている。2022年公開のドキュメンタリー映画「日本原 牛と人の大地」プロデューサー。

●守安　涼（もりやす・りょう）
編集者／編集デザイナー。1979年岡山市生まれ。編集プロダクション勤務を経て、2015年より吉備人出版にて編集・制作を担当。

●山川隆之（やまかわ・たかゆき）
編集者／吉備人出版代表。1955年岡山市生まれ。三重大学農学部卒業。地方紙記者、生活情報紙編集長を経て95年に株式会社吉備人を設立。『のれん越しに笑顔がのぞく』『シネマ・クレール物語』などの執筆・編集を担当。

となりの文学都市 ①

ダニーデン　ニュージーランド

世界の文学都市は、どんなところで、どんな活動をしているのか。世界の各都市にたずねてみる本コーナー、初回はニュージーランド南島の都市・ダニーデンのニッキーとアンに聞きました。

問：どんなプロジェクトがありますか？

慈善団体のケーゼルバーグ・トラストと一緒に、ライター・イン・レジデンスを実施しています。ダニーデンに6週間滞在しながら創作に取り組む機会を、作家に提供しています。他の文学都市からとニュージーランド国内の作家を、毎年交互に招いています。

2023年は、メルボルンから作家が訪れ、エッセイ集に取り組みながら、地元の文学コミュニティと交流しました。

問：おすすめの場所は？

トンネル・ビーチですね。海の彫刻のような砂岩の崖や岩のアーチ、洞窟を眺めたり、少し足を伸ばしてワイタキ・ホワイトストーンユネスコ世界ジオパークを探検して、太古の歴史に彩られた地質学的・文化的な驚異を味わうのもおすすめです。ダニーデンは文学スポットがたくさんありますが、実は野生動物の宝庫でもあるのです。

Anne standing in front of the cliffs at Tunnel Beach

Anne's favourite food - Whitestone Cheese

Nicky Page and Anne Shelah

問：好きな食べ物は？

ホワイトストーン・チーズです。近くにあるホワイトストーン・チーズ・カンパニーのブルーチーズやブリーチーズと、クラッカーの組み合わせが大好き！

【担当者】ニッキー（Nicky Page）ディレクター／アン（Anne Shelah）プロジェクト・コーディネーター

私たちの街の本や作家を広報したり、他都市とのプロジェクトのコーディネーターをしたりしています。

うったてインフォメーション

Information

投稿募集

「うったて」はみなさんと一緒におかやまのまちを描く雑誌です。次号から「うったてポスト」という投稿欄を設け、みなさまの原稿をご紹介します。第2号の特集テーマは「音楽中心生活」。演奏家、ミュージシャン、コンサートホールにライブハウス、楽器店や音楽教室など、おかやまの音楽について紹介したいこと、とっておきの話を教えてください。すてきなお話をお待ちしています。また、読んでくださった方からのご意見、感想をお待ちしています。掲載分には記念品を差し上げます。

投稿・ご意見・ご感想はこちらの応募フォームまで。

協賛・協力者を募集

「うったて」は文学創造都市おかやまの魅力を全国に発信するちいさな雑誌です。発行を応援してくださる方を募集しています。詳細は岡山市文化振興課へお問合せください。

編集後記

ライターインレジデンスで岡山に滞在中の乗代雄介さんから原稿が届き、決まりかけていた台割を変更した。巻末に予定していた乗代さんのエッセイを巻頭に、特集ページをそれに続くようにしたのだ。ビジュアルイメージもこの原稿によって決まった。ところが、乗代さんの写真が一枚もないことに気づいた。すぐ文化振興課のYさんへ電話した。「いつまで岡山に滞在しているの？　月曜日の午前中に写真を撮らせてもらえないだろうか」と要件を伝える。月曜日の午前10時過ぎに帰京する予定を昼過ぎに変更してもらった。写真家のKさんとの表町商店街の撮影に、乗代さんの撮影を加えてもらった。何度も商店街を歩き、「みんなの表町書店」での本選びを撮らせてもらった。乗代さんは、そこで見つけた黒い表紙のハードカバーを大事そうに抱えて、「ずっとほしかった本が偶然見つかったので」と東京に帰っていった。無理をお願いした申し訳なさが、その一言で救われた。（山川）

おかやま文学フェスティバル2024では、廃校となった小学校の体育館を会場に「おかやまZINEスタジアム」を開催した。（写真提供：瀬戸内ブッククルーズ実行委員会）

On reading
読む人、読む場所

うったて uttate　創刊号

2024年9月30日　発行

発行　岡山市／岡山市文学賞運営委員会
岡山市北区大供１丁目１-１
岡山市文化振興課内
電話 086-803-1054　ファクス 086-803-1763
https://uttate.net/

企画　文学によるまちづくり部会
編集　うったて編集委員会
制作　株式会社吉備人
印刷　株式会社三門印刷所
製本　日宝綜合製本株式会社

ウェブサイトも公開中！
https://uttate.net

City of Literature OKAYAMA

unesco Member of the Creative Cities Network

岡山市は「ユネスコ創造都市ネットワーク」の文学分野に加盟しています。